

N男が人との関わりを多く持つための指導

竹本紀子

1 N男の実態

[高等部二年生 18才。 精薄施設より通学。
I.Q. 39 (田中ビネー知能検査)]

- (1) 友だちや教師に話しかけることが殆んどなく、いつもぼんやりとしている事が多い。
 - 休憩時は窓際に立ち、黙って外ばかり見ている。
 - 友だちや教師の会話の中に入れても、すぐ離れてしまう。
- (2) 尋ねられたり、話しかけられたりすると、あいまいな返答をして逃げてしまう。
 - どんな問いかけにも、「はい。」と返事をする。
 - 返答に詰まると、すぐに「わかりません。」と言う。
- (3) 言語障害があり、話し言葉が聞き取りにくい事が多い。加えて、チック症状が激しく、“ウッ、ウッ”といった大声を絶えず発する。
 - 早口で言ったり、言葉の言いまわしがうまく出来なかったりする事が多い。
 - 不必要な声が出るため、それをごまかすかのように突然に場にふさわしくない言葉が出る。

人との関わりを持ちたがらないN男は、自分の意志や欲求を伝達することが出来ず、そのために損をしていることがずいぶん多いように思われる。施設内や学校内で生活している現在では、まわりの者が彼の心情を察知して、何らかの援助や指示を与えているために、さほどの不都合はなさそうに見える。しかし、卒業して社会参加をする時、人と関わる場面がいかに多いかを考えると、やはりN男の重点指導のポイントがここにあると思われるのである。周りの人たちと少しでも多く関わりが持てるようになれば、更に充実した生活を送るであろうとの見地から、この点についての指導を豊ねることにした。

2. 指導目標の設定

N男の実態をふまえ、彼が学校生活の中で見せるどんなささいな言動にも注目し、問題点を解決する糸口を見つける事に心を配った結果、次のような指導方針を設定することにした。

- (1) 友だちと関わらなければならぬ場面を多く作る。
- (2) 数多く問いかけをする。
- (3) 発問に対する返答の仕方を指導する。
- (4) 認められる喜びを感じさせる。
- (5) 自信を持たせる。

これらの指導方針が達成されやすい学習場面は、主に生活学習と音楽学習の時間ではなからうかと考える。すなわち、人との関わりを多く持つためには、ひんぱんに会話のやりとりをしたり、共同で学習する場面を多く設定することが必要であり、そのためには、生活学習の時間が効果的であると思われたのである。一方、彼の表情が乏しいことから、音楽に合わせて体を動かしたり、身体表現をしたりする学習を通して、友だちとも交流させ、精神的な緊張感を解きほぐす事が出来れば、からだ全体で喜びを表現したり、友だちともうまく関われるのではないかと期待したのである。

3 指導の実際

(1) 生活学習を通して

二年生は9名によって編成されているが、理解力の差が著しく、学習内容の設定にも難しい面が出てくることから、能力別に二つの班に分けて学習することが多い。N男は理解力に乏しい方の班に所属しているわけであるが、5人のメンバーとの関わりを深くするために、次のような手だてを行った。

- ① 共同の作業場面を多く設定し、最も仲の良い友だちと二人で作業することから始め、関わる範囲を次第に広げていく。
- ② どんなにささいな発言でも取り上げて返答をし、発言したことに喜びを感じさせる。
- ③ 班長あるいはそれに類する役割を与え、できるだけ皆に関与できるように話させる訓練をする。

- ④ 発問に対する正しい返答の仕方を覚えさせ、すぐに「わかりません。」と言ったり、何にでも「はい。」と言ってしまわないように、適切な言葉でその都度指導をする。

(2) 音楽学習を通して

高等部の音楽学習は習熟度別に二つの組に分かれている。N男の属する組では、特に身体表現やリズム指導に重点を置き、音楽に合わせて自由に体を動かしたり、振りをつけて歌ったり、教師の模倣をしたり、といった活動を取り入れている。N男がどんどん自己表現が出来るように、次のような手だてを行った。

- ① 援助を必要とする友だちと組み、絶えず声かけをしたり、手をつないだりさせる。
- ② 二人組で身体表現をする時には、自分の意志で組み手を選ばせ、自分の方から声かけをする場面を設定する。
- ③ 皆の前で表現する機会を徐々に増やし、億する心を失くさせ、ほめられることにより自信を持たせるようにもっていく。

(3) N男の変容

話すことに抵抗のあったN男ではあったが、少しずつ変容していく様子が認められた。

- ① 誰に対してともなく、ひとり言のようにしゃべる事が多くなり、教師と視線が合うことが多くなった。
- ② 休憩時には、教師の傍に寄ってきて、黙って教師を見つめている事が多くなった。
- ③ 他の学級の教師に対しても、通りすがりに肩をつついてふざけて逃げるようになった。
- ④ 下校の際、「〇〇さん、帰りましょう。」と誘うことができた。

※ 変容の事例 I

T: きょうは、どんなテレビを見たの?	N: ... 〇〇です。
T: おもしろかった?	N: はい。... ちょっとです。
T: どんなお話だったの?	N: わかりません。
T: え??	N: 女の子が水を飲んだ。
T: それから?	N: ねむたかった。

※ 変容の事例Ⅱ

T: きのは、お風呂に入ったの?

N: はい。

T: お風呂のない日じゃなかったの?

N: あ、すみません、間違えました。

T: いいよ、謝らなくても。

N: どうも、すみません。

友だちとの会話は、まだうまく成立しないが、N男が会話を望んでいる様子は伺える。発音は不明瞭ではあるが、語りかけられた途端に逃げ腰になる事が少なくなってきた。今年のN男の年賀状には、人と関わろうとする意欲があふれていた。

「あけましておめでとうございます。今年は、先生とたくさん話をします。友だちと話をします。」

4. 今後の課題

人との関わりを持ちたいとN男自身が思うようになってきた事が、私にとって最大の喜びであった。今後もこの指導は継続して行なわれなければならないが、まだ多くの課題が残されているのである。

(1) 会話の内容に深まりを持たせる。

N男自身が語りかけてくる言葉は、「明日はお休みです。」「今日の下校は、1時です。」といったたぐいのものが多い。ここから更に発展させて、もっと会話に深まりと広がりが出てくるようにしたい。

(2) 言葉で自己表現をさせる。

相手の誤解や勘違いに対して黙っていることなく、「それはこうです。」といった主張ができるようにさせたい。

(3) 生徒との関わりを持たせる。

大人はN男に対して常に寛大な態度で接している。そのため、大人への関わりを持つことには抵抗が失くなってきている。今後は同年代の人とも関わりを深めていくようにさせたい。

N男が無口であり、一人ぼちでいる事はまだ多いけれど、ぼんやりとしていた視線が、次第に誰かの姿を追っている視線に変わっていることから、N男の今後の成長を大いに期待している。